

屍をめぐる記憶のポリティクス
現在の中国の「万人坑」を例として
王 楠 (WANG Nan) *

中国において「万人坑」は、戦争や天災など通常ではない形で命を喪った人々が埋まっている場所の通称であり、死者が多いため、無造作に埋められなければならない状況を含意する。日中戦争の間、日本軍はその占領地域で多くの「万人坑」を生み出し、大量の軍人や民間人が集団的に殺害された。南京中華門の「万人坑」もその中のひとつである。戦後、中華門の「万人坑」は掘り返され、遺骨の一部が南京軍事法廷へ送られて日本人戦犯を裁くために用いられた。しかし、結審後も南京の「万人坑」は正式な墓地にはされず、「忘却の穴」となってしまった。一方で、旧「満洲国」地域に残された「万人坑」は、「旧社会」砒業労働者の苦難の象徴として、国共内戦や抗美援朝（朝鮮戦争）の大衆動員時には、漢奸（民族の裏切り者）や日米帝国主義を含めた階級の敵を告発するために用いられた。1960、70年代には、社会主義教育運動の興隆に従い、東北や華北などの地域で多くの「万人坑」の上に展覧館が建設され、遺骸を階級闘争の道具とするブームが巻き起こった。

中国の伝統的な習俗では、遺骸は恐ろしい存在であり手続きに則ってすみやかに埋葬されるべきものである。すなわち「入土為安（土に入って安らかになる）」である。民事的なもめごとのために、遺族や同郷者などが故意に遺骸を晒し出し争議の解決のための武器とするような習慣は現在の中国においても依然と存在している。しかしながら、遺骸を掘り出し長期間の展覧に供することは、現代中国の発明と言える。1980年代に入ると階級闘争が中国政治の表舞台から退場するに連れ、「万人坑」展覧館も次第に忘れ去られていった。

1982年、南京の江東門である「万人坑」が発見された。当時、日本で教科書問題が発生したため、長年忘れられていた南京大虐殺の存在が再び注目された。これに続き、南京市政府はこの「万人坑」の発掘を進め、南京大虐殺記念館を建設した。受難者の遺骸は日本軍の暴虐を告発するための武器となり、さらには民族の苦難の記憶の記号へととなった。

階級闘争が描いた「万人坑」同様に、南京大虐殺記念館に展示された遺骸は身元不明で匿名性を有している。発掘時期が遅かったため、事件の具体的状況を思い返すことのできる生存者はほとんど残っておらず、その匿名性はさらに深まった。このため、日本の歴史修正主義者は南京の「万人坑」の遺骸の真実性に対して疑義を呈している。歴史修正主義者に反撃するために、南京大虐殺記念館は1988-99年の第二期発掘事業において、「万人坑」の遺骸の科学的鑑定を進めたが、依然として「匿名性」の問題は解決していない。

けれども遺骸の匿名性は民族の記憶の象徴化を妨害せず、むしろその集団としての特徴が死者を現代の集団的記憶の政治闘争の中へと溶け込ませるのに有益であった。このほか、南京大虐殺記念館の展示戦略と芸術的表現に対する観察を通じて、匿名の集団の中にも差異が存在していることを見いだせる。特に突出しているのは、女性や子どもを中心とする民間人群である。しかし被害者数としても最も多い兵器を手放した軍人を中心とする成人男性の存在は軽視されており、「忘却の穴」の奥深いところに放置されたままなのである。

（翻訳 中山大将、巫靚）

* 南京大学歴史学博士課程大学院生。